

# 育児中の母親が語る虐待不安の背景要因の検討

教育心理学コース 渡 邊 茉奈美

The Backgrounds of Abuse Anxiety among Parenting Mothers.

Manami WATANABE

The purpose of this study was to investigate the backgrounds of abuse anxiety among parenting mothers. Semi-structured interviews were conducted to 8 mothers, and statements that were considered as factors of abuse anxiety were categorized. The categories are (1) "child factor," (2) "lack of physical and mental capacity," (3) "awareness of excessive anger," (4) "unclear boundary between discipline and child abuse," and (5) "other's eyes." The results indicate that especially "child factor" exists behind abuse anxiety widely, and by interacting with the mother's factors or other social factors, it could have significant influence on the mother's abuse anxiety. As a conclusion, because the anxiety is caused by a variety of backgrounds, it should be noted that it is essential to consider appropriate actions to mothers by taking each factor of abuse anxiety in account.

## 目 次

### 1. 問題

- A. 「虐待不安」への着目
- B. 「虐待不安」を語りから把握することの必要性
- C. 本研究の目的

### 2. 方法

- A. 研究参加者
- B. 手続き
- C. 半構造化面接
- D. 分析方法
- E. 倫理的配慮

### 3. 結果と考察

- A. 基本統計量
- B. 虐待不安を語る背景要因
  - 1. 子ども側の要因
  - 2. 物理的・精神的余裕のなさ
  - 3. 過剰に怒っていることへの自覚
  - 4. 境界の曖昧さ
  - 5. 周りの目
- C. 育児中の母親が語った虐待不安の背景要因間の関連
  - 1. B子の場合
  - 2. E子の場合
  - 3. F子の場合
  - 4. 育児中の母親が虐待不安を抱くことによる影響

### 4. 総合考察

### 5. 注・引用文献

#### 1. 問題

##### A. 「虐待不安」への着目

現在、日本での子ども虐待の児童相談所における相談対応件数は増加傾向にある<sup>1)</sup>。これは、単純に子ども虐待そのものが増加しているという見方もあるが、「泣き声通告」の義務化や、「子ども虐待」がメディア等で頻繁に取り上げられることによって、社会全体が「子ども虐待」に敏感になっているためとも考えられる。このように、社会全体が「子ども虐待」に敏感になることは、子ども虐待の早期発見を促すと考えられる。しかしそれと同時に、多くの現象が「子ども虐待」として認識されるようになり、母親自身が育児において「虐待しているのではないか」、「子どもを虐待する母親として責められるのではないか」といった不安、すなわち虐待不安を増加させる可能性がある<sup>2)</sup>と指摘され<sup>2)</sup>、実際に虐待不安を訴える母親が増加している<sup>3)</sup>。虐待不安とは「育児の中で感じられる不安のうち虐待に対する漠然とした不安や恐れを伴う状態」と定義され、育児不安のひとつと考えられている<sup>4)</sup>。このような虐待不安を抱きながら育児を行うことは、虐待行為を防ぐ抑止力になるとも考えられるが、一方、母親の精神的健康や育児の質にネガティブな影響を及ぼす可能性も示唆されているため<sup>5)</sup>、育児中の母親にとって

は虐待不安を低減させる方が望ましいだろう。また、虐待不安は、年齢や学歴、経済的な豊かさなど虐待そのもののリスクの有無にかかわらず存在することが指摘されているため<sup>3)</sup>、母親がどのような虐待不安を持っているかを知ることによって、ハイリスクでないためにこれまで見過ごされがちであった母親に対する支援の可能性も広がると考えられる。したがって、虐待不安を生み出す要因を的確に把握し、虐待不安の低減に向けた適切な支援を考える必要がある。

## B. 「虐待不安」を語りから把握することの必要性

虐待不安についてはこれまでも注目されていたが、その測定方法は“子どもを虐待しているのではないかと思うことがある”という単項目によるものであった<sup>6)7)</sup>。しかし実際には、“虐待しているのではないか”、“子どもを虐待する母親として責められるのではないか”のように多様性があると考えられる<sup>2)</sup>。そこで渡邊 (2015)<sup>5)</sup>は、育児中の母親を対象とした調査から虐待不安尺度を作成し、虐待不安の構造として、「虐待自己評価不安（自分の育児を「虐待」と評価してしまうことへの不安）」と「虐待他者評価不安（自分の育児を身近な他者から「虐待」と評価されることへの不安）」の2因子を提示した。ただし、この研究では虐待不安の構造を明らかにするにとどまっており、不安を抱く背後にある詳細な状況や心的状態については検討されていない。例えば、あまりに手がかかる子どもであったり、子どもの気難しさに悩んだり、子どもが思うようにならずにうんざりするといった日常的なネガティブな育児経験の中で、子どもを可愛いと思えなかったり、“産むんじゃなかった”と後悔したりすると同時に、そう考えてしまう自分に自己嫌悪を抱き否定的な感情が生じるといった状況がある<sup>3)</sup>。実際に虐待不安に着目した支援を考える時、虐待不安を抱いているか否かに加え、虐待不安に至る状況や心的状態を把握し、それらに寄り添い不安を低減させるような支援を提案していく必要があるだろう。したがって本研究では、育児をする中で虐待不安を抱いた経験について具体的に問うことによって、虐待不安に至り得る状況や心的状態を詳細に捉えることを目的とする。

なお、本研究ではインタビューによる質的調査を行う。なぜなら、従来の研究では虐待不安を捉える際、先述の通り量的な測定が行われていたが、育児に関してはその背景があまりにも多様で、量的に捉えることが必ずしも現実を反映しているとは言い切れない状況があると考えられるからである。大島 (2013)<sup>8)</sup>も、

母親自身の発達や子ども側の要因、夫婦関係など多様な要因が絡み合う子育ての現実を捉えるには、まず母親の主観的な子育て体験を基に、そのような要因を捉え直す必要があると述べている。特に虐待不安に関しては、母親がそもそも「子ども虐待」をどのようなものとして認識しているかによっても左右されるだろう。実際に虐待のニュース等を見聞きすると、加害者は“しつけのつもりだった”と述べることが多々ある。このように「子ども虐待」と「しつけ」との境界が曖昧であるため、育児を行う親はますます自分の行為が「子ども虐待」にあたるのかと不安に思うこともまた想定される。李・山下・津村 (2012)<sup>9)</sup>は、多くの母親たちが実際に「子ども虐待」と「しつけ」の境界線に迷い、厚生労働省により挙げられている虐待23行為を“「しつけ」で行ってよい”と考えているのは多くて6割であることを示している。このことから、参加者自身が「子ども虐待」をどのように認識した上で育児を行っているのかということも併せて詳細に検討する必要があるだろう。よって、育児中の母親を対象とした面接調査を通して、母親の主観から虐待不安を抱く背後にある状況や心的状態をボトムアップに捉えることが望ましいと考える。

## C. 本研究の目的

以上より、育児中の母親が抱く虐待不安の背景要因を、母親の主観から把握することが、虐待不安の低減、ひいては後の虐待を防ぐ支援の提案へとつながると考える。ゆえに本研究では、これまでの研究では捉えられてこなかった虐待不安の背後にある具体的な状況や心的状態を、育児中の母親の語りから詳細に明らかにすることを目的とする。

なお、本研究では対象を母親のみとし、父親やその他の育児に関わる大人は対象としない。この理由は二点ある。一点目が、日本における父親の育児参加はまだ発展途上であり、現実には、父親はいるが、実際の育児には参加しないという日本特有の育児環境がまだにあると指摘されているためである<sup>10)11)</sup>。二点目は、子ども虐待の加害者として実母が最も多いことが報告されているためである<sup>1)</sup>。この状況もまた、育児への従事時間に占める母親の割合が高いことを示唆していると考えられる。したがって、本研究では母親のみを対象とした調査を実施し、母親が語る虐待不安の背景要因を把握する。

## 2. 方法

### A. 研究参加者

育児中の母親9名を対象に、2016年4月から5月にかけて調査を実施した。ただし、このうち1名は、語られた虐待不安が対象児<sup>12)</sup>に関するものだけではなく、他のきょうだいに関するものも多数含まれていた。そこで本研究ではこの母親を分析から除外し、対象児についてのみ虐待不安を語った母親8名(平均年齢35.63歳, SD=4.72歳)を分析の対象とした。

### B. 手続き

これまで筆者が行っていた妊娠期から子どもが生後24ヶ月になるまでの縦断調査に参加していた母親のうち、追加調査(本調査)への協力を承諾した母親を対象に半構造化面接を実施した。このような母親を対象とした理由は2つある。1つは、筆者が行った縦断調査をはじめとし、これまでの虐待不安研究においては、敢えて「虐待不安」に関する直接的な質問を避けることによって、参加者から自然と発される「虐待不安」を捉えてきた。しかし本研究では、その目的の性質上、事前に「虐待不安」について説明を行った上で調査を依頼することで、母親の「虐待不安」に関するより具体的に詳細な語りを引き出すことが可能となると判断したため、縦断調査終了時点で「虐待不安」について詳しく説明を行った母親たちを対象とした。もう1つは、「虐待不安」にまつわるエピソードを語る際、「虐待をしているのではないか」といった不安をすでに抱いている母親は少なからず社会的な望ましさを意識し、実態とは異なる語りをする可能性が高い。そこで、妊娠期から産後24ヶ月までの約3年間、筆者と面接を重ねラポールを形成してきた参加者を対象と

することによって、この可能性を低め、彼女たちが経験している現実により近い語りを引き出すことができると考えた。

### C. 半構造化面接

筆者の所属する研究室または参加者の指定した公共の場所や参加者の自宅にて、11分17秒~46分15秒(平均時間26分34秒, SD=9分56秒)の半構造化面接を実施した。調査開始前に本研究の目的や個人情報の保護等に関して説明を十分に行い、録音や結果の公表についての同意を得た上で、内容を全て録音し逐語録を作成した。

実際に使用した質問項目についてはTable 1に挙げた通りであった。まず、先述したように、参加者が「子ども虐待」をどのように捉えているのか(虐待観)、また、「虐待」と「しつけ」の境界をどう設定しているのか(育児における許容範囲)についての項目を設定した。続いて、虐待不安が「子ども虐待」に敏感な社会の中で生じたことが指摘されているため<sup>2)</sup>、母親自身のメディア等への反応を何う項目を設定した。それから、虐待自己評価不安と虐待他者評価不安<sup>5)</sup>それぞれについて、育児をする中で感じるのか、あるとすれば具体的にどのような場面で感じているのかということのエピソードとしてできるだけ詳細に語ってもらった。

### D. 分析方法

虐待不安の背景要因を明らかにするため、逐語録から各参加者の虐待不安の背景要因に該当する語りを、意味内容単位で抜き出した。抽出した語りの数は計86個であった。

続いて、KJ法<sup>13) 14)</sup>を参考に、抜き出した語りを何

Table 1 半構造化面接における質問内容

項目	質問内容
虐待観と 育児における許容範囲	「子ども虐待」と聞くと、どんなものをイメージしますか 自分の育児やしつけにおいてどこまで許容できますか
メディアへの反応	虐待に関する報道や貼紙等にどれくらい関心を持って見開きますか それらを見開きた時、どのようなことを思ったり、考えたりしますか
虐待自己評価不安	自分の育児やしつけの中で「虐待しているのではないか、このままでは虐待してしまうのではないか」と感じることはありますか、あるとすればそれはどのような時ですか 自分の育児やしつけの中で、子どもを可愛いと思えなかったり、産むんじゃなかったと後悔するなど、ネガティブな気分や感情になったことはありますか、あるとすればそれはどのような時ですか
虐待他者評価不安	自分の育児やしつけの中で「子どもを虐待する母親として責められるのではないか」と感じることはありますか、あるとすればそれはどのような時ですか 他の人の目を気にして、育児やしつけがやりづらいなど感じたことはありますか、あるとすればそれはどのような時ですか

度も読み、意味の近いと考えられる語りを収集してグループ化した。グループ化した語り全体を見渡し、それらに共通する表札を1つのグループに1つ付けた。この作業を繰り返し、最終的に虐待不安の背景要因として含まれるカテゴリー数は5、サブカテゴリー数は17であった。以上の作業を、筆者自身で行った。後日、最終的に抽出されたカテゴリーの妥当性を検討するため、筆者が作成した評定マニュアルにより、それぞれのカテゴリーの特徴を提示し、大学院生2名が全ての語りを再分類した。評定者間の一致率は、評定者Aは71.43%、評定者Bは61.90%であった。一致率が低くなった理由としては、抽出した語りの中に複数の要素が混在しているものもあり、どのカテゴリーに分類することが妥当かの判断が困難であったためと考えられる。そこで一致しなかった項目については、前後の文脈も提示し、評定者間で協議の上、再分類を行った。

#### E. 倫理的配慮

本研究に関わるすべての文書は事前に著者の所属大学倫理専門委員の承認を得ている。参加者には調査開始前に研究の調査内容および調査協力の任意性について十分に説明を行い、同意を得た上で調査を実施した。

### 3. 結果と考察

#### A. 基本統計量

本研究の参加者の年齢、子どもの数、対象児の月齢、対象児の性別、家族形態、および職業をTable 2に示した。本研究における対象児の平均月齢は29.25ヶ月 ( $SD = 2.38$ ) であり、全員が2歳児であった。対象児の年齢に偏りが出てしまったのは、先述したように、筆者が行っていた生後24ヶ月までの縦断調査終了後すぐ

に、本調査への協力を依頼したためである。2歳から3歳にかけては、歩行の確立といった運動能力の発達、二語文の出現といった認知能力の発達など、あらゆる能力が開花し、その子どもの急激な発達によって母親の情動が正にも負にも大きく揺さぶられる時期のひとつであると考えられる。その中でも特に、自我の芽生えに伴うイヤイヤ期の出現は、「魔の2歳児」とも言われるように、母親にとって非常にストレスフルな状況であり、日常的に否定的な感情を抱きやすい時期であると指摘されている<sup>15)16)</sup>。子どもは何をするにも「イヤ」と言い、母親は繰り返される子どもの「イヤイヤ」の中で苛立ちなどを感じ、時には力で抑えつけるような対処に出してしまうこともある。こうした状況が、後悔などの否定的な感情と共に、いずれ虐待不安につながる可能性もあるのではなかろうか。ゆえに本研究では、対象児の年齢の偏りによる影響を考慮する。

#### B. 虐待不安を語る背景要因

本研究から抽出された虐待不安の背後にあると考えられる要因のカテゴリーおよびサブカテゴリーの定義、発話数、発話人数をTable 3に示した。本研究から、育児中の母親が語る虐待不安の背景要因のカテゴリーは5つ、サブカテゴリーは17個に分類することができた。各サブカテゴリーについて、具体的な語りを引用しながら以下に詳述する<sup>17)</sup>。

1. **子ども側の要因** この要因は、発話数、発話人数ともに最も多く、直接的にも、そして他の要因を介して間接的にも虐待不安に対し強く影響を及ぼす要因であると考えられる。『子どもが言うことを聞かない』、『子どもが思う通りにいかない』、『子どもが何でも自分でやりたがる』、『子どもの大泣き』、そして『子どもが公共の場で不機嫌になる・泣く』は、い

Table 2 基本属性

ID	年齢	子どもの数	対象児の月齢	対象児の性別	家族形態	職業
A子	35	2	31	女	核	専業主婦
B子	38	1	31	女	核	専業主婦
C子	32	2	33	女	核	会社員
D子	33	1	28	女	核	会社員
E子	45	2	31	女	核	パート
F子	36	2	27	女	核	会社員
G子	38	2	27	男	核	会社員
H子	28	2	26	女	核	専業主婦

ずれもイヤイヤ期特有の問題であると言える。その中でも、前者3つは、“うまくいかないことが多いのと、彼女って、あの、なんだろう、ワガママというか、そういうのが結構ある方なので、そういうことにイラッとしたりとか（A子）”という語りにも代表されるように、思う通りにいかなかったり、ワガママな子どもの行動により、母親が怒りなど否定的な感情を抱く状況である。『子どもの大泣き』や『子どもが公共の場で不機嫌になる・泣く』は、“ずっと泣かせっぱなしとかぎゃーぎゃー騒ぐ時に外からこれは虐待なんじゃないかって思われるかなって思うことはあります（C子）”のように、家庭内外での子どもの主張行動により、他者の目を気づかう状況である。『子どもの言語能力の未熟さ』は、“もう最初から動物とかだったらあれなんですけど、なまじなんかわかってるって思っちゃうから、怒っちゃうんですよね（B子）”のように、子どもの言語能力が急速に発達している段階だからこそ、母親の期待にそれが達していない時、怒りなど否定的な感情が生じる状況である。

2. **物理的・精神的余裕のなさ** これもまた、直接的にも間接的にも虐待不安に影響を及ぼし得る要因のひとつである。『余裕がない』は、特に具体的なその原因が述べられず育児における余裕のなさが語られており、それ以外は、例えば“自分の体調的には結構不安定な時期が今まであったりとかで、休みたいけど、構って構ってみたいな感じでやってるし、まあ自分の体調もあるしその中で働いているのは結構きつくて疲れたまあってとかってのもあるし、それを、周りに理解してもらえているところもあれば、なかなか難しいところもあったりもするんですけど（D子）”のように、具体的にその原因について言及されていた。

3. **過剰に怒っていることへの自覚** これは、子どもを叱る過程もしくはその結果として生じている行動や感情であり、虐待不安を抱くのとほぼ同時に生じている。“キレてることにまず後悔しちゃうんですよ（B子）”や“言いつぎでなあって頭の中で思いながら言ってます（E子）”に代表される『後ろめたさを感じながら怒る』は、子どもに対する自分の行動について自責の念に駆られている状況であり、これが虐待自己評価不安を引き起こすと考えられる。それに対し、“人前で、なんか、軽くポンって頭叩いたりとかする（H子）”に代表される『怒鳴る・叩く』は、その事実のみが語られ、反省などといった自分に関する否定的な感情は伴わない。だが、その行為を他者が評価する際にはもしかすると否定的に評価される可能性があるという虐待他者

評価不安を導く状況であると考えられる。また、『手が出そうになる』はこれらとは異なり、実際にまだ決定的な行動をしていないが、“産まれてからは結構自分も（中略）思わずなんか手が出そうになったりとかすることが、あったりもした（D子）”のように、子どもに対し手をあげてしまいうようになった経験から、その先に虐待に至る可能性を危惧する語りが続いた。

4. **境界の曖昧さ** 『境界が曖昧でわからない』は、冒頭でも述べたように、「子ども虐待」と「しつけ」の境界が曖昧であるため<sup>9)</sup>、“暴力はやっぱりやっちゃいけないと思うんですけど、あの、これが暴力にあたるのかわからないんですけど、なんかこう、物を投げた時とか、手にダメよってやるのを、暴力にあたるのかどうかっていうのは迷います。（中略）よくわかんないですね、そこは、やっていいのか悪いのか（C子）”という語りにも表れているように、自分の育児に自信が持たなくなっている状態である。

5. **周りの目** 例えばE子は、『子どもが公共の場で不機嫌になる・泣く』という状況で、“やっぱりみんな見ます、周りの方が見るので”虐待他者評価不安を抱くと語った。このような状況は、やはり、E子自身も含め社会全体が「子ども虐待」に敏感になっているからこそ生じるものであろう。

### C. 育児中の母親が語った虐待不安の背景要因間の関連

本研究の結果から、育児中の母親が虐待不安の背後にあるものとして語った要因間の関連図をFigure 1に示した。そこで続いて、各カテゴリーおよびサブカテゴリー間の関係について、3名の母親の語りから例解する。

1. **B子の場合** B子は、35歳で対象児（女兒）を第一子として出産しており、高齢出産であった。B子は、5つのカテゴリーの中でもその発話数が圧倒的に多い「子ども側の要因」と「物理的・精神的余裕のなさ」、「過剰に怒っていることへの自覚」から虐待自己評価不安を語ったという点で、本研究参加者の中では典型的な語り方をしたと考えられる。B子は、ネグレクトと身体的虐待、性的虐待を「子ども虐待」に当てはまるものとして語ったが、それらの質問の前に、自発的に虐待不安を抱いたエピソードを語り始めた。

“肉体的な虐待とか、その、ネグレクトというか、その、衛生とか栄養を放置しちゃうっていうのはともかくとしてその、精神的虐待とかいうとほんとに自分もまさに昨日、ダメと言うのに（子どもが）塩をこねくり回して床にばらまいたりすることが。（中略）それでダメって言ってもやめないからお風呂場に連れ

Table 3 虐待不安を抱く背景要因

カテゴリー	サブカテゴリー	定義	発話数	発話人数
子ども側の要因	子どもが言うことを聞かない	子どもがワガママで言うことを聞かず、自己主張が激しい	14	5
	子どもが思う通りにいかない	子どもが母親の期待と異なる行動をする	9	2
	子どもが何でも自分でやりたがる	子どもが何でも自分でやりたがるため時間がかかる	3	1
	子どもの大泣き	家で子どもが大声で泣き叫ぶ	3	2
	子どもが公共の場で不機嫌になる・泣く	公共の場で子どもが不機嫌になり騒いだり、泣いたりする	2	2
	子どもの言語能力の未熟さ	子どもの言語能力が飛躍的に発達しているため、理解していると勘違いさせられる	3	1
合計			34	7
物理的・精神的余裕のなさ	余裕がない	時間や心に余裕がない	7	3
	自分の不調により余裕がない	自分が寝不足や体調不良のため余裕がない	5	2
	下の子の出産により余裕がない	下の子を出産したことにより余裕がない	2	2
	育児不安がある	育児についての(虐待以外の)不安がある	1	1
	仕事でのストレス	仕事でうまくいかないことがありストレスを感じている	1	1
	頼れる人がいない	自分の親など育児について頼れる人がいない	3	2
合計			19	6
過剰に怒っていることへの自覚	後ろめたさを感じながら怒る	子どもに対する自分の行動について後悔している	16	4
	怒鳴る・叩く	子どもに対し怒鳴ったり叩いたりする	9	4
	手が出そうになる	子どもに対して手をあげそうになる	1	1
合計			26	5
境界の曖昧さ	境界が曖昧でわからない	「しつけ」と「虐待」の境界が曖昧でわからない	5	2
周りの目	周りの人から注目される	子どもの声や自分の声で周りの人が注目をする	2	2

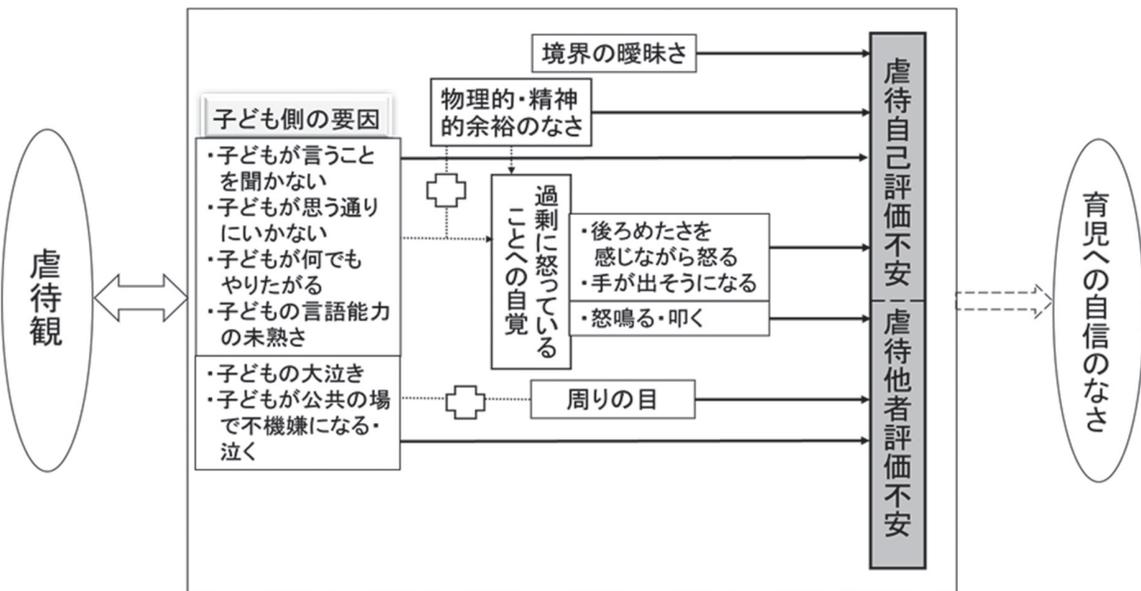


Figure 1 育児中の母親が語る虐待不安の背景要因間の関連

ってそこでやってととか言ってその間台所にお掃除したりしたけど、(中略)肉体的性的ネグレクト、そこはまあクリアできて精神的っていうとほんとに結構(子どもに対して)声あげちゃったりとか、(中略)大人っていうか夫レベルの、よっぽど甘えてる相手にしかキレないようなキレ方を子どもにしちゃってとかしょっちゅうあるから、とにかく危ないとかダメなことをダメと言ってるのに聞いてくれないとね、(中略)子どもなんだからしょうがないと思うんだけど、でも一方ですごい発達するじゃないですか。昨日できなかったことが今日できるみたいにぐんぐんわかるし言葉もしゃべれるようになるのに、一方で全然そうだから。なんかわざとっていうか(中略)わざとだろわかってるくせにみたいな。ほんとにわかってないのかもしれないけど、わかってんじゃないかって思っちゃうから腹立つんだと思うんですね。ほんとに何もわかってないってことが納得いけばこんなに怒んなくてきつ”と語り、“産む前はなんか、もっと子どもに優しくしてあげればいいのって外でイライラしてるお父さんお母さん見て思ってたんだけど、(中略)今あなたのやってることは虐待ですって言われるとちょっとやばい”と虐待不安を訴えた。これらは『子どもが言うことを聞かない』、『子どもの言語能力の未熟さ』といった「子ども側の要因」がある中で、『後ろめたさを感じながら怒る』と同時に虐待不安に至った例として考えられる。さらにB子は、“余裕持てばキレずに済むってわかってるんだけどなかなか”と、『余裕がない』こともまた、つい“キレ”てしまうことの背景にあり、結果的に虐待不安を導いていることを示唆した。B子は、“こんなこと思っちゃう自分はやはり産むべきではなかったのかとかそういう自分に向かうネガティブな時があります。こんなことでイラつくような私という人間はやはり母親として失格ではとか。この子にとって良くない親だとか。こんな親で可哀想とかそういうネガティブさが”とも語っており、自分の育児への自信のなさも強く感じているようであった。

以上から、B子は、「物理的・精神的余裕のなさ」の中で「子ども側の要因」が重なった時、つい“キレ”てしまうといった反応をし、「過剰に怒っていることへの自覚」と共に虐待不安を抱くようになったと考えられる。そして、このような虐待不安を抱いているからこそ、虐待観を語る中で精神的虐待についてのみ「子ども虐待」に含まれるものとして明確に言及することを避けたのだろう。

2. E子の場合 E子は、42歳で対象児(女兒)を

第二子として出産し、産後すぐは“しばらく専業主婦で良い”と語っていたが、子どもが1歳になると“働きたくなってきた”と感じ始め、1歳半で“家にいるのが苦痛になってきた”と述べ、1歳10ヶ月で週に2、3回午前中だけ子連れで復職をした。E子は、身体的虐待とネグレクトを「子ども虐待」に当てはまるものとし、その程度の善し悪しについても言及した。E子は、虐待他者評価不安の項目に対し、“(虐待他者評価不安を感じる)ことがあります。通勤する時に朝9時半くらいの地下鉄でこの子と一緒に乗ってたんですけど、やっぱりなんか、調子の良い時は全然いいんですけど、機嫌の悪い時になると抱っこしてちょっと何か当たただけで痛いとか、やめてとか言うんですよ。で、私なんかそれを聞くと、別に誰に何か言われたわけじゃないのに何もしてないよねって言い訳をしてしまうんですね。ママ何もしてないからって。その時ですね。(中略)やっぱりみんな見ます、周りの方が見るので、どうせなんか思われてるんだろうなと感じます”と、興味深いエピソードを語った。このようにE子は、子どもが日常的に『子どもが公共の場で不機嫌になる・泣く』ことがあると述べ、その時、『周りの人から注目される』中で、その視線に敏感に反応し、“言い訳”をしてしまうと述べた。E子は、“苦痛になってきた”家の中から解放され、社会復帰を果たしたにもかかわらず、「周りの目」の存在によってかえって新たな苦悩を抱えることとなったのだ。

「子ども側の要因」によって、「周りの目」を気にし、自分は自分の虐待観に当てはまるようなことをしてなくとも、つい“言い訳”をしまいいたくなるという状況は、E子に限らず誰も経験し得ると考えられる。このような状況が生まれる背景には、やはり「子ども虐待」が社会全体に浸透し、母親も含め、人々が敏感になっているということが考えられる。母親が“言い訳”をせずとも、周囲が優しいまなざしで見守る環境を整える必要があるのではなかろうか。

3. F子の場合 F子は、33歳で対象児(女兒)を第一子として出産し、産後3ヶ月経たないうちにフルタイムで復職した。しかし18ヶ月には再び妊娠し、産休に入った。本調査時にはすでに第二子を出産していた。F子は、身体的虐待と精神的虐待を「子ども虐待」に当てはまるものとして語った。F子は虐待観と育児における許容範囲を問う中で、例えば“お友達を(子どもが)叩いちゃった時に、叱る時に叩かれたら痛いんだよって言うのと、同じようにこうやったら(叩いたら)痛いでしょうっていう感じで、(子どもに対し

て) やるべきなのかやらないべきなのか」というように『境界が曖昧でわからない』ため、叱り方に関する悩みを抱えていることを明らかにした。その上で、虐待自己評価不安に関する質問に対し、“虐待には当たらないと思うんですけど、見方によってはそういう風に見える人もいるかもしれないなって思う”と、「境界の曖昧さ」ゆえに、自分の叱り方に自信を持つことが出来ず、「しつけ」ではなく「子ども虐待」に当たる可能性を危惧する語りをした。

このように自分の育児の自信のなさを語ったという点で、「境界の曖昧さ」が育児中の母親にとって脅威であると言えるだろう。しかし、先述したように「子ども虐待」の境界線を明確に引くことは非常に困難であり、育児中の母親にとっては常に曖昧なものであり続けると考えられる<sup>9)</sup>。よって、母親たちの虐待不安を少しでも低減させるため、「境界の曖昧さ」にどう対処していくことが可能なか、模索する必要がある。

**4. 育児中の母親が虐待不安を抱くことによる影響** 母親たちが語る虐待不安に至る過程は非常に多様であるが、B子やF子の語りから、母親たちは育児を行う中で虐待不安を抱くことによって、育児に対する自信が低下していることも考えられる。育児に対する自信の低下は虐待不安と同様に育児不安のひとつと考えられており<sup>10)</sup>、後の虐待を予測するリスク要因でもある。したがって、育児中の母親たちが虐待不安に至る状況は、やはり決して看過することはできず、虐待不安の低減を目指す支援を提案する必要があると言えるだろう。

#### 4. 総合考察

本研究は、育児中の母親が語る虐待不安の背景要因について、半構造化面接で得られたエピソードを通して具体的に検討した。育児中の母親が語る虐待不安の背景要因は、「子ども側の要因」と「物理的・精神的余裕のなさ」、「過剰に怒っていることへの自覚」、「境界の曖昧さ」、そして「周りの目」の5種類に分類でき、さらにそれらには17種類のサブカテゴリーが含まれることがわかった。これらの多様な組み合わせと、それぞれの持つ虐待観とが関連し合いながら虐待不安を導き、そしてそれらは時に母親の育児に対する自信の低下さえも招いている可能性が示唆された (Figure 1参照)。

特に、「子ども側の要因」については、8名中7名の母親が虐待不安に至る背後に、直接的にも間接的にも存在する要因として挙げていた。子ども側の要因と

いうのはBelsky (1987)<sup>19)</sup>も述べていたように、そもそも虐待を招くリスク要因のひとつである。先述したように、本研究で対象とした2歳という年齢は、自我の芽生えに伴うイヤイヤ期に代表されるように母親にとってはストレスフルな時期であり、誰もが経験する困難な時期であると言える。したがって、このような時期に子どもに対しネガティブな感情が生じるのは当然だと言っても過言ではない。では、このような時期にいる母親にはどのような支援があり得るのだろうか。例えば、高濱ほか (2008)<sup>16)</sup>が述べているように、この時期の対策として、母親のもつ枠組み(“食事をきちんととること”など子どもへの期待や要求)のゆるみが重要となってくるだろう。育児中の母親がこのイヤイヤ期に抱える苦悩に対し、事前に備えることができるよう促す教育的介入が、一つの支援として可能なものではなかろうか。

それから、『子どもの言語能力の未熟さ』のように、急速に発達する子どもの能力を高く見積もることも、この時期特有の状況であり、「子ども側の要因」に含めているものの、それと同時に、子どもの能力について期待をしてしまう母親の傾向であるとも言える。これは、養育者がまだ言葉を話さない子どもを、つい「心をもった独立した存在」と見なしてしまう傾向を意味するマインド・マインデッドネス (Mind Mindedness: MM)<sup>20)</sup>にも似ていると考えられる。MMは、親子の関係性を表すアタッチメントの安定型を予測するポジティブな母親の傾向とされているが、本研究で語られた状況というのは、かえって母親の虐待不安を高めるというネガティブな結果を導いていた。子どもの能力を高く見積もり、足場かけをすることも子どもの発達にとって重要であるが、それに加えて、自分の子どもの発達を適切に見積もり、大人と同等の能力があるという思い込みを取り払うことが虐待不安にとっては必要なかもしれない。

ただし、本研究の限界とも関わるが、実際には、発達段階によって生じ得る「子ども側の要因」は異なると考えられる。例えば、本研究で分析から除いた母親は、第一子が0歳の時の虐待不安を語り、その背景として、夜泣きがひどい、ミルクをうまく飲んでくれないといった乳児期特有の大変さを挙げた。このように、子どもの発達段階にしたがって、母親の虐待不安の背後にある要因が何なのかということも具体的に明らかにし、その時期に適した支援を施す必要があるだろう。

また、E子のように「周りの目」を気にし、自分は悪いことをしているつもりがなくとも、つい“言い訳”

をしてしまいたくなるという状況も興味深い結果であった。「子ども虐待」が社会全体に浸透し、母親も含め人々が敏感になり、子どもが泣いているというだけで、母親はまるで罪人になってしまったかのように感じてしまう。「子ども虐待」への関心が高まり、虐待の早期発見が促されることは重要であるが、一方、母親が“言い訳”をせずに済む環境を整えることも重要であろう。

最後に、本研究の限界として、サンプルの偏りが挙げられる。上記のように対象児の年齢による結果の偏りに加え、本研究に意欲的に参加をした母親たちが対象となっていたという自己選択バイアスもあると考えられる。そもそも本研究の参加者は、妊娠期から生後24ヶ月までの縦断調査に参加しているため、他の母親たちに比べれば、時間的にも精神的にも余裕がある可能性が高い。さらに、最後まで縦断調査に参加した母親26名の中で、本研究の「虐待不安に焦点化したインタビューをしたい」という趣旨を承知の上、協力した母親たちは、ある程度「虐待不安」への共感も高いと考えられる。しかし、このようにローリスク層であると考えられる母親たちの中でも、「虐待不安」に共感し、エピソードが豊富に語られたという点で、田中(2010)<sup>3)</sup>も述べているように、リスクの有無にかかわらない、より多くの母親に対する支援の可能性が開けたとも言えるのではなからうか。

以上のことを踏まえ、今後の研究では、筆者が行った縦断調査から、子どもの発達段階に沿って虐待不安の背後にある要因を詳らかにし、虐待不安の低減に寄与するより幅広い知見の提供を行っていく必要があるだろう。

## 5. 注・引用文献

- 1) 厚生労働省. (2015). 子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について(第11次報告)厚生労働省 2015年10月8日 <<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/000009959.pdf>> (2016年8月24日)
- 2) 大澤朋子. (2005). 今日の児童虐待対策の矛盾:「虐待不安」拡大の視点から. *社会福祉*, 46, 67-80.
- 3) 田中千穂子. (2010). 「虐待不安」から見えるもの. *都市問題*, 101, 84-91.
- 4) 庄司一子. (2003). 子育て中の母親が抱く虐待不安. *日本教育心理学会総会発表論文集*, 45, 737.
- 5) 渡邊茉奈美. (2015). 「虐待不安」の構造:虐待不安尺度の作成の試み. *子育て研究*, 5, 41-51.
- 6) 恒次欽也・庄司順一・川井尚. (1999). いわゆる育児不安に関する調査研究(1):「育児困難感」の規定要因に関する研究. *愛知教育大学研究報告*, 48 (教育科学編), 123-129.
- 7) 恒次欽也・庄司順一・川井尚. (2000). いわゆる育児不安に関する調査研究(2):最新版質問紙による「育児困難感」の規定要因に関する研究. *愛知教育大学研究報告*, 49 (教育科学編), 125-132.
- 8) 大島聖美. (2013). 中年期母親の子育て体験による成長の構造:成功と失敗の主観的語りから. *発達心理学研究*, 24 (1), 22-32.
- 9) 李 環媛・山下亜紀子・津村美穂. (2012). しつけと虐待に関する認識と実態:未就学児の保護者調査に基づいて. *日本家政学会誌*, 63 (7), 379-390.
- 10) 柏木恵子. (2008). *子どもが育つ条件:家族心理学から考える*. 東京:岩波書店.
- 11) 柏木恵子. (2015). *おとなが育つ条件:発達心理学から考える*. 東京:岩波書店.
- 12) 語りの中心となった子どもを指す.
- 13) 川喜田二郎. (2015). *続・発想法*. 東京:中央公論新社.
- 14) 竹内 理・水本 篤. (2012). KJ法入門:発想や仮説を得るには. 竹内理・水本篤(編), *外国語教育研究ハンドブック:研究手法のより良い理解のために* (pp.258-184). 東京:松柏社.
- 15) 高濱裕子・渡辺利子. (2007). 子どもの反抗・自己主張とそれに対する母親の感情および対処:2歳と3歳の比較. お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, 4, 15-25.
- 16) 高濱裕子・渡辺利子・坂上裕子・高辻千恵・野澤祥子. (2008). 歩行開始期における親子システムの変容プロセス:母親のもつ枠組みと子どもの反抗・自己主張との関係. *発達心理学研究*, 19 (2), 121-131.
- 17) 鉤括弧(「」)はカテゴリー名, 二重鉤括弧(『』)はサブカテゴリー名, ダブルクォート(“”)は語りの引用である. また, 引用した語りの中で下線部は, サブカテゴリー生成の際に注目した部分である.
- 18) 渡辺弥生・石井睦子. (2005). 母親の育児不安に影響を及ぼす要因について. *法政大学文学部紀要*, 51, 35-46.
- 19) Belsky, J. (1978). Three Theoretical Models of Child Abuse: A Critical Review. *Child Abuse & Neglect*, 2, 37-49.
- 20) 篠原郁子 (2003). <mind-mindedness>とは何か——養育者による子どもの心的状態の読みとりとそれが支える相互作用の在り方——*教育方法の探求*, 6, 69-75.

(指導教員:遠藤利彦教授)